

## &lt;最近のコロナ事情&gt;

11月中旬に開催された研修会で、三重病院院長の谷川清洲先生のご講演を拝聴する機会を得ました。谷川先生はWHOや国立感染症研究所でご勤務された経験を持つ、感染症診療の第一人者です。コロナ禍の最中、よくテレビ出演されていたのでご存じの方も多いと思います。

最近コロナは減ってきた、軽くなった、風邪のようになった、検査もしなくていいや、という方が増えてきた気がします。私はこの4年間多くのコロナ患者さん達を診てきました。流行の波を越える毎に症状の特徴が変化するのを肌で感じています。以前の様に高熱ありきではなく、熱も無くだるくもなく、少し喉が痛いだけという方もいます。そういった意味では確かに軽症化してきていますし、症状が軽いと検査を希望する方も少ないです。

一時ほぼ全国民が接種したコロナワクチンも、今では接種希望者が減り、これまで無償でしたが自己負担も始まりました。コロナ陽性の方の診療費や薬代も有料化され、特に薬は非常に高額のため希望する方が減っています。あれだけ大騒ぎしたコロナも、すっかり日常的な風邪の一種のように扱われる時代になったわけです。

しかし本当にそうでしょうか？というのが谷川先生のお話でし



た。「実はコロナは減っていない」「確かに軽症例は増えたが死亡者数は変わっていない」「年に2回流行することは確実」「long covidと呼ばれる後遺症には、脳にコロナウイルスが持続感染をして記憶障害や倦怠感を起こす、心疾患のリスクが高くなる、1型糖尿病などの自己免疫疾患が増える、などがある」「後遺症の半数はワクチンで予防が出来る」「レプリコンワクチンはウイルスが複製されて他人に感染させるというデマが流れているが全くの嘘」「通常のワクチンは3ヶ月しか持たないが、レプリコンワクチンはウイルスの一部のタンパクを複製するので効果が1年ほど持続する」。巷で広がる情報や普段の認識とは異なるお話を、正確なデータと共に伺うことが出来ました。まだまだ侮ってはいけない病気であるということです。

ただ、だからといって「ユニバーサルマスキングで皆が予防に徹する」「全員ワクチン義務！」という話ではなく、上記の正しい情報を理解した上でどうするかを個々が選択し決定する（Informed decision）時代に来たということでした。

## &lt;発達障害と事故&gt;

同じ研修会で、近所で開業されている「うめもとこどもクリニック」の梅本正和先生のご講演も拝聴しました。梅本先生は小児科医であると同時に、小児精神領域にもお詳しい先生です。三重県は児童精神科医が少ないので、身近な小児科の先生がメンタル面も診てくださるのは大変心強いですね。

先生のご専門の中には、虐待や事故で死亡したこども達の調査を行うお仕事もあります。交通事故や転落事故などこどもの不慮の事故の原因として、発達障害が隠れている可能性があるというお話を伺いました。最近発達障害は話題になることが増えており、実際患者数も増加していると聞きました。代表的なものはADHD（注意欠

陥多動性障害)とASD(自閉症スペクトラム障害)です。衝動的にスピードを出して自転車を漕いでいて交通事故にあったり、兄弟で遊んでいて家の窓から転落した症例があるそうです。こうした事故を起こした子ども達の生育歴、家庭環境、これまでの生活エピソードなどを調査すると、発達障害が関係していることがあると先生は仰っていました。逆に言えば、発達障害のある子ども達に対し、周囲の大人は特に注意をし、事故予防対策をする必要があるということです。子どもの特性を理解した上で、先回りして対処することで事故を未然に防ぐことができれば、大切な命を守ることに繋がります。



#### <全国救急隊員シンポジウム(秋田)に招聘されました>

事故を未然に防ぐ、といった点では私が日頃から活動している「気道異物事故」の啓発活動もその1つです。先日も北海道札幌市の保育園で、1歳児が肉を詰まらせて窒息死亡しました。その年齢に適切な大きさ、硬さの肉であったのか、見守りはどうであったか、そして詰まったときに正しい対処法が行われたのか。報道からは読み取れませんが、一体いつまで同じような事故が繰り返されるのでしょうか。

気道異物事故をゼロにしたい!という思いで啓発活動を続けていますが、同じ思いで活動をしてくださっている消防士、救命救急士の方々が何と遠く離れた秋田の地にいらっしゃいました。保育園児のお子さんを持つ女性の救命救急士さんと、同僚の女性消防士さんが「親子向けに啓発活動をしたい」と意気投合し、エプロンシアターで啓発をするための題材となる絵本を探していたところ、私の作った「つぶっこちゃん」を見つけ利用してくださることになりました。

た。このご縁で今回全国救急隊員シンポジウムに招聘して頂き、秋田までお伺いすることになった訳です。正に「つぶっこちゃん」が繋いでくれたご縁です。

私がアドバイザーを務めたパネルディスカッションでは、秋田に加え長崎、徳島、愛知からも熱意を持ってこどもの事故を防ぐための啓発活動を行っている消防士さん、看護師さんのお話を伺うことが出来ました。またこども家庭庁の職員さんもお発表され、皆で事故予防のために連携していきたい気持ちを確認できました。

私と看護師、保育士、栄養士などでチームを組んで気道異物の啓発活動を行う「つぶっこの会」では、津市を中心に定期的に親子向けイベントを行っています。この学会では秋田消防本部の方々によって、我々と同じようなイベントが2日間に渡って行われました。今回は私もその中に入れていただき、お話しする機会を頂きました。

小さなお子さんを持つご家庭の悩みはどこも同じです。何でも口に入れてしまう、もし詰まったらどうしたら良いか不安、いつ頃どんなものを食べさせれば良いか分からない・・身近に聞ける専門家がいたらきっと安心して頂けると思います。最近はYouTubeなどの動画でも色々情報収集できますので、手軽に知りたいときは是非活用してみてください。気道異物事故の場合、もし異物が詰まったときの「気道異物除去法」や、異物が取れず呼吸や心拍が止まり意識がなくなった場合に行う「心肺蘇生法」などを行いますが、実際に体験してみないと習得しにくいと思います。消防が主催する救命講習や我々の「つぶっこの会」のイベントを利用して、もしもの時に備えましょう。

